

イエスが解き明かされた神

(マタイ6・25〜34)

一、イエス・キリストによって

私たち人間は、どうやって神を知ることができるのでしょうか。最も考えやすいのは、神の側から人間に近づき、語りかけてくださることです。ですが、そんなことを語りますと、歴代の宗教創始者たちが一様に、「私が求めたのではありません。天が私に臨んでくださったのです」と答えることであります。そこで、神はだれに語りかけてくださったかを見極める必要があります。神を万物の創造主と呼ぶなら、創造主は様々な形で、真理を求める人たちに断片的に語りかけられたのだと考えられます(ローマ2・9〜11を参照)。神を創造主と捉えるなら、すべての人は、間接的に神に造られたものです。「間接的に」と言いましたのは、子供は親の似姿として、親のかたちに生まれるからです(創世記5・3を参照)。そして人間は、創造主から愛され、またさばかれる対象です。

たお方がまことの神であると結論づけるのは、早急に過ぎます。なぜならアダム以来、人間はまことの神から離れているからです。すなわち、神と私共の間には罪があるからです。罪の問題が解決されなければ、創造主を創造主として認識することはできません。では罪の問題は、すなわち人がまことの神から離れている問題は、どのように解決されるのでしょうか。聖書によれば、神が人となられた救い主、イエス・キリストによって解決されます。これが、聖書のメッセージの中心です。

聖書によれば、神は、ご自身を求めようとする真摯な者に現れられました。それは、アダムの息子アベルに始まり、セツ、エノシュ、エノク、ノア、アブラハムと続きます。そして、アブラハムの子孫からイスラエル民族が興されました。イスラエルは不信仰のゆえに主からさばかれてしまいました。そして、主は、預言者を通して語り続けられました。そしてイスラエルから、神の子であり、神御自身であられる主イエス・キリストが誕生しました(ヘブル1:1〜2bを参照)。

二、イエスによって神を知る

25節前半をご覧ください。<ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着よう

かと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。>と、人となられた神であり、救い主であられるお方が語られました。25節だけを見ますと、主イエスが「心配したりするのはやめなさい」と教えておられるようにも読めてしまいます。そうしますと、「心配してはならない」という新しい律法が増し加わったようにも読めてしまいます。ですが、もしそうであるなら福音、すなわち善き知らせにはなりません。

聖書は、とどころに改行がなされていますので、それに添って、25節から新しい内容が始まっているものとして読んでしまいがちです。ですが25節は、<ですから>ということばから始まっていますから、その前に語られたことを指して、主は語っておられます。

すなわち、24節の<あなたがたは神と富とに仕えることはできません>を指して、主が語っておられることが分かります。例えば、神と富とに仕えるとは、「神だけが私の助けです」という思いがある一方で、「神によらなくても、私に与えられた賜物を生かして、人生を渡り歩いて行けます」という、変な自信を持つことです。「そういうことはできません」と語られているのが24節です。ということは、ここで大切なことが分かります。心配しないこと、思い煩わないこと、思い悩まないことは、そのようにしなさいと語られている「教え」な

のではなく、あるいは「律法」なのでもなく、「賜物」であることです。

これに気づくときに、主イエス・キリストを信じる信仰が何であるかが分かります。主イエス・キリストを通して、創造主を信ずるとは、すなわち父・子・聖霊なる神を信ずるとは、罪の問題が解決されて、新しいいのちに生かされることなのです。したがって、心配する、思い煩う、思い悩むのは、愚かなことであり、未だに地上のいのちに生きていくことの現れなのです。それを知って、26節で語られた主イエスのことばをお聞きください。

三、イエスが解き明かされた

キリスト教会が保ってきた信仰は、イエス・キリストが神の遣わされた人であり神御自身であり、救い主であることです。このお方は、人類の元祖アダム以来、人間に入って来た罪の問題を解決されました。そのために、十字架で人類の罪を背負い、罪人として聖なる神からのさばきを受けてくださいました。神が人間の罪を赦すために、神ご自身が罰を受けられたという意味です。それが、主イエス・キリストの姿であり、神の御姿なのです。

イエス・キリストを見るとときに神が分かります。是非、聖書が語るこのメッセージを受け止めてください。